九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

根の国

田村, 圓澄
九州大学

https://doi.org/10.15017/2231589

出版情報：九州人類学会報. 5, pp.8-11, 1977-12-15. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

根　の　国

九州大学　田　村　圓　澄

日本神話にあらわれる根の国について、定説になっているのが、本居宣長の黄泉国説である。一般に樹木の根は地下にあることから、宣長は、根の国を、下っ底の地下の国、すなわち黄泉国と解した。津田左右吉氏も宣長説を承け、根の国を死者の国としている。

根の国＝黄泉国説の障碍は、説話の筋書からすれば、スサノヲが、生きたままで根の国に行かねばならないことである。しかしスサノヲは、神話の世界では死を迎えたことがない。スサノヲを生きたままで、根の国に追いやる話は、根の国＝死者の国の解釈をとる限り、納得できないのではないか。

宣長の根の国＝黄泉国説は、樹木の根にこだわり、根を地下とのみ結びつけて解釈しようとしているが、しかし根には、「根元」「根本」の意味がある。すなわち、「もと」「はじめ」「おこり」の解釈が可能である。この立場をとるならば、根の国を、垂直的に地下にのみ求めるべきでなく、水平的に海の彼方にも求めることができると思う。

神話の根の国は、常にスサノヲと関連して現われるが、スサノヲに対する蔑視と、根の国に対する蔑視とが深くかかわりあっていると思う。まずスサノヲであるが、「甚無道」「悪態不止而転」と記されたスサノヲは、父母のイザナギ・イザナミからうとんじられ、姉のアマテラス大神から見放され、さらに八万神からも憎悪の目を向けられ、高天原を追放される。

神話の世界で、スサノヲほど身内・周辺から憎まれ嫌われ、最後に追放の処置をまで受ける神はない。そして根の国は、スサノヲのような無道者、暴悪者の国として描かれている。注目されるのは、黄泉国が死者一般の行くべきところであるのに対し、根の国は、スサノヲのみの行くべき国であったことである。根の国は、無道者、暴悪者であるスサノヲの国であり、一方的に嫌悪され、蔑視されるしかなかった。根の国に行くことを運命づけられたスサノヲには、救済の手段は見出されないのである。

スサノヲは、アマテラス大神と対照的に描かれている。アマテラス大神は光り輝き、八万神の仰ぎみるところであるが、スサノヲは乱暴者であり、八万神の追放をうける。アマテラス大神の高天原は根の国とは対極的であり、スサノヲは高天原に住むことができないのである。

アマテラス大神の耕す田は、霖雨や旱天にも損害を受けない「安田」「平田」の良田があったのに対し、スサノヲの田は、耕作に適せぬ「磧地」であった。この二つの田の対比は、実は豊穣の地の高天原＝葦原中国と、不毛の地の根の国との対比でもある。両者は高下・尊卑の価値体系のなかにくみこまれている。

しかしスサノヲにとって、根の国は本国であった。「永帰根国」は、スサノヲと根の国との関係を暗示しているが、またスサノヲの居住の舞台を辿ることにより、このことがあきらかになるであろう。

(1) オノゴロ嶋で生まれたスサノヲは、父母から嫌われ、根の国に追いやられることになる。

(2) スサノヲは根の国に行く前に、姉のアマテラス大神に別れを告げるため、高天原に上る。

(3) アマテラス大神から本心を疑われ、八万神から罰せられ、追放の処分をうける。

(4) 高天原から出雲の簸の川上におりる。

(5) 根の国におもむく。

つまりスサノヲは、高天原→出雲→根の国と移っているのであるが、ただし高天原は、姉のアマテラス大神に別れを告げるために赴いたことになっており、したがって高天原への道順は、スサノヲに即していえば、かならずしも本筋とはいえない。「永就乎根国」がスサノヲの姿であるとすれば、根の国→出雲→根の国こそ、スサノヲの本来のコースではなかろうか。

『日本書紀』のスサノヲ像において注目されるのは、第一に新羅と関係をもっていたこと、第二に海の支配者であったことである。

高天原を追われたスサノヲは、子のイタケルを伴って「新羅国」に降り、「曽尸茂梨之処」にいたが、やがて埴土で舟を作り、海を渡って出雲に移ったという。『日本書紀』で新羅の国名が初めてあらわれるのは、神代巻であり、そしてスサノヲとの関連においてであった。

元慶の『日本書紀』の講書のとき、惟良高尚が上の曽尸茂梨を「若今蘇之保留処歟」と解し、人びとを驚かせたが、「蘇之保留」は「徐耶伐」「徐羅伐」であり、ソウル、すなわち王都を意味する。惟良氏は百済系渡来氏族といわれ、朝鮮半島のことについての知識をもっており、曽尸茂梨の新解釈を下すことができたのであろう。ところでスサノヲの順路は、高天原→曽尸茂梨→出雲である。高天原→出雲→曽尸茂梨でなかったことが注意される。

『古事記』によれば、イザナギはアマテラス大神に高天原の統治を命じ、月読命には夜の食国の、またスサノヲには海原の支配を命じたという。スサノヲにとって、海の支配と根の国との往来は不可分であった。根の国を新羅と考え、そしてスサノヲが新羅と出雲との間を往来したとすれば、スサノヲは海の支配者でもあったわけである。

新羅と出雲との往来には、船を用いるしかない。海の支配者であったスサノヲは、また船の運用者でもあった。船材として必要な杉や杼樟の植林や栽培、造船や航海などの知識・技術を、スサノヲは身につけていた。

ところで新羅は、「財宝国」「金銀之国」「宝国」であった。スサノヲは、「韓郷の嶋には、これ金銀あり」といっている。『古事記』『日本書紀』の神話のなかで、新羅は根の国として蔑視さ

れる反面、金銀財宝の国として憧憬されている。

新羅が、暴悪者・無道者の国としてのイメージに結びついたのは、５３２年の新羅による金官加耶の併合や、同じく５６２年（欽明２３）の大加耶（高霊）などの滅亡の事実であった。加耶との友好関係の維持を政策としていたヤマト朝廷にとって、新羅は悪行者・無道者の国であった。加耶の復興が、欽明以降のヤマト朝廷の宿願であっただけに、新羅に対する憎しみは深まったが、とくに６６０年（斉明６）の百済の崩壊は、新羅に対する憎悪を激しくした。亡国の百済人がヤマト朝廷に迎えられ、その百済人が文化面で指導的な役割を果たすようになっただけに、悪行者の国＝新羅の評価は決定的であった。

新羅を、金銀・財宝の国とするイメージの成立の時期は、天武・持統・文武朝の、いわゆる白鳳時代であったと思う。新羅と唐との対立があらわとなり、新羅は日本に接近するが、金銀・財宝の国＝新羅のイメージは、この時期に形成されたのであろう。

ヤマト朝廷側に、新羅に対する統治権が、神から天皇に授けられたとする主張があった。『古事記』によれば、神功皇后に神がかりして、金銀の輝く珍宝の国＝新羅の統治者は、神功皇后の胎中にある応神天皇であると告げられる。これを告げた神は、アマテラス大神であり、また住吉の三神であったというのである。

ヤマト朝廷による新羅支配を合理化する論理であるが、しかし、アマテラス大神が、新羅に対する統治権を胎中の天皇に授ける構想と、いわゆる天孫降臨によって、葦原中国の統治権を幼いニニギに授ける構想とには、共通の要素があると思う。統治権を与えられたのが、嬰児ないし胎中の子であったこと、そして統治権を与えたのが、アマテラス大神であったことである。

『日本書紀』にみられる新羅のイメージは、第一に、国を奪う無道者・悪行者の本国であった。スサノヲと新羅との結合は、暴悪者スサノヲのイメージが基調となっている。すなわち加耶を奪い百済を滅ぼした新羅人のイメージとが結びついている。新羅は無道者の国であり、スサノヲはその象徴であった。第二に、スサノヲは、新羅を本国とする新羅人の一面をもっている。スサノヲは新羅から出雲に渡り、さらに出雲から新羅に追いかえされるが、この発想の背景に、スサノヲの本国としての根の国の観念があったように思われる。第三に、新羅は金銀の国であり、財宝の国であった。この新羅に対するヤマト朝廷の統治権は、アマテラス大神から天皇に授けられたが、すなわちヤマト朝廷の新羅支配は、神の意志であった。神統譜において、スサノヲをアマテラス大神の弟にしているが、この作為の根底には、ヤマト朝廷による新羅支配の合理化の意図が隠されているのではあるまいか。

根の国は、単に地理的な存在であるばかりではない。また宗教的立場から解明しつくされるものでもないと思う。根の国は、朝鮮半島とヤマト朝廷との対応・接触の過程のなかで形成されており、

したがって神話的・民俗的な性格をもっていると共に、むしろそれ以上に、政治的性格をもっている点に注目する必要があるであろう。